

優秀賞

“普通”の幸せ

愛知県 愛知教育大学附属岡崎中学校 一学年

津村 真緒

「いってきます。」「いってらっしゃい。」

「ただいま。」「お帰りなさい。」

「今日の学校はどうだった？」

「今日も楽しかったよ。」

毎日繰り返しられる、当たり前でありふれた会話。私たちの多くは、果てしない青空のように、この当たり前の毎日が永遠に続くことを信じて生きている。私も同じだった。母からこの話を聞くまでは。

「ただいま。」

帰宅すると、いつも学校での出来事を両親と話す。

「特に何もなくて普通だった。」

の一言で終わる日もあれば、楽しいことがあり、会話が盛り上がって長く話続ける日もある。

その日は、特に話したいこともない普通の日だったと思う。いつも通りの返事をする、母が言ったのだ。

「普通の一日を過ごせることは、幸せだよね。」

私は、言葉の意味が理解できず、首をか上げた。

「どういふこと？」

母は続ける。

「お父さんが入院した時のことを覚えている？」

当時私は二歳だった。父の入院先に近いという理由で、母の実家にしばらく住んだこと。父の病室でゼリーを食べ、父と会話したこと。そしていつの間にか父は元気になり、また以前の日常に戻ったこと。ほとんどない記憶を懸命に思い起こしても、断片的な一瞬の風景しか頭に浮かんでこない。

しかし、その時両親は大変だったはずだ。突然失った普通の毎日。一家の大黒柱である父が働けなくなり、収入はストップしてしまう。入院費、治療費と出費は重なっていく。父の見舞いと幼い私を抱えた母が働くことは難しい。父は自分の体に加え、お金のことも心配だっただろう。私なら、次々と押し寄せる不安に押しつぶされていたに違いない。

「生命保険に入っていたから、入院費や治療費の負担が軽くなって助かったよ。」母は笑った。私は心底驚いた。生命保険が私たちを助けてくれるなんて、一度

も考えたことがなかったからだ。

両親は結婚後、家族のこれからを考え、生命保険に加入していたのだった。病気で入院するかもしれない、事故によるケガで働けなくなるかもしれない。予想ができない未来に備えるためだ。

しかし、私の中に疑問が浮かんだ。もしも何も起こらなかったら、ただ保険料を支払い続けるだけになるかもしれないのだ。

「その時は、保険料を支払って、安心を買ったり誰かを助けていると考えればいいんだよ。」

母の言うことに、「確かに。」と納得した。私たちは、目には見えないけれども、もしものことが起こっても、生命保険が助けてくれるから大丈夫という毎日の安心を受け取っているのだ。そして、安心と引き換えに支払った保険料は、どこかで困っている人のために今も使われている。

「備えあれば憂いなし」「転ばぬ先の杖」もしもの時のために、今できる備えをする。そうすれば、「もしも」が起こっても私たちの負担は軽減する。まさにことわざ通りのことが、私の身の周りで起こっていたのだ。

生命保険は私たちの暮らしを陰ながら支えてくれていることを、初めて知った。そして、母の言葉の意味を理解した。生命保険に加入することで、私たちは「安心」を手にし、「普通」の幸せな毎日を過ごすことができるのだ。

私には今、はっきりと分かる。生命保険という強い味方に守られ、「安心」して「普通」の毎日を幸せに生きている。

空を見上げると、果てしなく青空が広がっている。私は祈る。この青空のように、「安心」で「普通」の幸せが永遠に続くことを……。